

NEWSLETTER

No. 11

岐阜大学国際交流室 1991年3月31日発行

留学生は生きた文化

教育学部長 松岡三良

昭和60年(1985)の初頭であったと思います。文部省は外国人留学生の受け入れを、21世紀に向けて10万人にしたいという構想を発表しました。丁度その頃は日本全体では約1万5千人、岐阜大学では約60名(4%)の留学生がいました。平成3年(1991)現在では全国で約4万人の留学生が在学しているということです。その中で岐阜大学では約120名(3%)が在籍しています。この比率が増えますと、日本全体で10万人に達するときは、岐阜大学では約240名(2%)ということになりますでしょうか。2、3年前、岐阜大学国際交流委員会でも将来の留学生数を検討しました。その数は300名を超えていたと思います。いづれにしても近い将来、岐阜大学では先生2人に1人の留学生という比になると思います。

アメリカやヨーロッパの諸大学と比較してみまして、決して私共の大学が受入れの設備も条件も整っているというわけではないのですが、とにかく日本の経済や技術を求めて押しよせる留学生の波の一部は、とにもかくにも、まず受入れねばならない国際状態にあることは事実のようであります。実験室も狭いではないか、機器も不足ではないか、指導者も足りない。文句をいえばきりはないのです。だからといって「用意ができましたから、どうぞおいで下さい。」ということには、まず私共が生きている間にはなりそうもありません。

この際、開き直って岐阜大学の教職員学生の皆さんには、多数の留学生の受入れを積極的に取り組んでいただけたらと思うのですが如何でしょう。狭い教室や実験室に日本の学生と一緒にしてもらいましょう。設備の足りないことも一緒に苦労してもらいましょう。

しかし気持ちだけはほがらかに楽しく持ってみようではありませんか。現在岐阜大学では24ヶ国から留学生が来ています。近い将来は30ヶ国も50ヶ国にもなるでしょう。彼等はそれぞれの自国のすばらしい文化を背負って来ています。私共が外国へ出たとき、どれほどの日本文化といえるものを身につけて、外国の人達にそれを紹介できるかを考えますと、恥ずかしくなるくらい彼等は立派な文化を持っています。彼等留学生諸君と積極的に学び教えあって交流を深めましょう。教職員の皆さんも学生諸君ももっと気軽に留学生に声をかけてあげて下さい。彼等もそれを待っています。(1991.2.18)



インストラクター紹介

語学ボランティアとして

大野 美代子

外国人への語学ボランティアのため、岐阜大学国際交流室をはじめて訪れたのは、昭和61年の1月でした。小雪の散らつく、とても寒い日でした。

あれからもう五年の歳月が流れました。

高校で国語の教師の経験もあったので、教えること自体には不安はありませんでしたが、第一日目から“日本人と外国人に教えることの違い”や、“国語と日本語の違い”等をまざまざと見せつけられ、いっぺんに自信をなくしてしまいました。

さっそく、南山大学で二十年近く、日本語を教えている親友に電話をして、テキストの選択、教授法、外国人に教える時、気をつけなければならない基本的なこと、その他、失敗談など、いろいろ教えてもらいました。大変参考になり、しみじみと親友の有難さを感じたものでした。

特に、最初の一、二年は、自由に希望する学生に教えることができたので、自分の力を充分発揮することができました。

その学生の要望や目的、そして、本人の日本語能力にあったテキストなどをさがしたり、自ら作成したりするのも、その時は、大変だったけれども、今から思えば、楽しい毎日でした。

「教えることは学ぶことである」ということばがありますが、本当にその通りだと思いました。

日本語の勉強だけでなく、さまざまな国の人達の考え方や、物の見方、その他、国際交流室での人間関係など、いろいろ勉強させていただき、貴重な歳月だったと思っています。

長い人生の中で、このような経験をさせていただきました岐阜大学のみなさまに、心より感謝しています。



西村 幸子

何かお役に立ちたいとPTTPになってまだ一年余りです。予定を立て準備して出かけますが日頃何気なく使っている日本語が何とむずかしい事か、その都度勉強の必要を痛感しています。

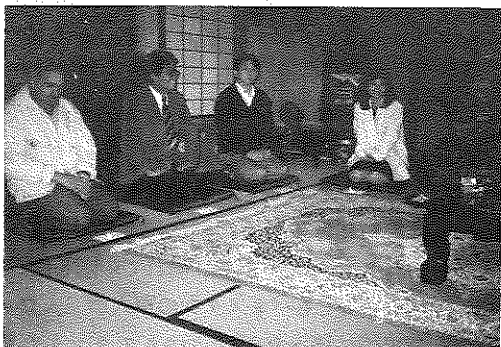
過日、日米女性会議が岐阜で開かれました時、ボランティア通訳で参加させていただきましたが、出席者がすべて会社社長、管理職の女性ということで素晴らしく精力的でキラキラ輝いているのには（ファッションではありません）目を見張りました。さすがに女性が男性と対等に働いている国だなと思いました。（対等な



い面は数あると訴えていましたが)日本では、男女雇用機会均等法が施行されて五周年を迎えていますが、今なお女性が対等に働くためにはいくつかのハードルがあり、社会のしくみ、制度などを改革していく必要はありましようが根本には男性、女性の意識の問題があったりして、経済大国とはいえ、生活者の中身はまだまだの感があります。

私が担当していたヴェトナムのレイさんは交通工学の専門ですが、私が日本的な感覚でそういう専門分野には女性は珍しいと云いましたら、そうではなくて、半々位の割合で女子がいるという事を聞き、またおどろきでした。ヴェトナムでは女性も男性も平等にチャンスが与えられ平等に処遇されると。こういう人達が将来自国に帰って男女の差なく能力を発揮し、活躍する事ができると思い、心から拍手を送ります。

毛利 千恵子



映画のワンシーンの様な湾岸戦争の映像を毎日テレビで見ていると、今ほどに“平和”という二文字の重みを感じる事はありません。何故、あのような悲しいことが。一日も早くこの同じ地球上にいきる者同士仲良く幸せに生きる事の出来る日を祈る他ありません。

私事ですが、幸いなことに、この正月も我家では数ヶ国の人達が集まり同じ食卓を囲むことが出来ました。(かつてあの争いのあったイラン、イラクの人も交えて。)そして都合で皆

とは同席ではなかったけれども三年前教えていたペルーのユリサがハンサムな日本人の御主人と来てくれたことは殊更嬉しいことでした。

早いもので六年近くになるでしょうか、私が“岐阜大学行き”のバスに乗るようになって。多くの人達と出会える幸せは、他のインストラクターの皆様と同様で、私も感謝している一人です。

最後に一言、先日来岐され国際交流について講演された中根千枝さんが、「相手が何人だか忘れる位になったとき理想的な交流が出来る」とおっしゃっておられました。そんな交流から真の友情が生まれ、小さな輪が大きな輪に広がっていったら素敵ですね。

雪蓮峰登山 その後

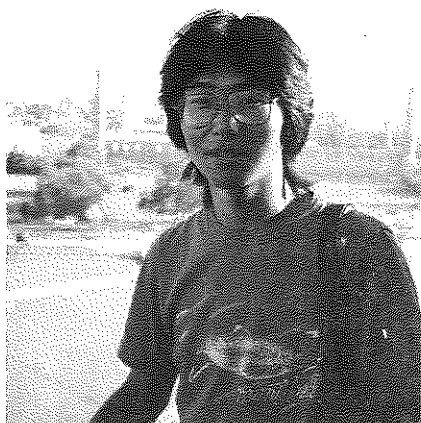
工学部繊維工学専攻 M2 鈴木 幹 夫

私は昨年の夏に日本山岳会東海支部の主催する日中友好雪蓮峰登山隊に参加し(「岐大ひろば」第14号の19ページ参照)、その後本隊と別れた後一人でパキスタン、ネパールなどを旅しました。

中国のカシュガルから南へパキスタンまで続くKKH(カラコルムハイウェイ)という道があります。昔はシルクロードとして知られた道です。私はその道を昔の隊商よろしくバスで通過しました。カシュガルからパキスタンの国境の町スストまで二日がかりの行程です。

バスの出発時間もわからず宿を出たのはよいのですが、出発は正午、6時間もずっとまちぼうけです。少しずつ夜も明け、その間にパキスタン人のアリと少し話をした。彼は日本のビザをとるた

めに香港までいった帰りのようだ。不法労働者が多いためなかなか日本の大使館がビザをくれないとぼやいていた。そうこうしているあいだに出発、回りはほとんどパキスタン人、彼ら以外はニュージーランド人の女の子が一人だけ。カシュガルを出てすぐに回りは砂漠、砂漠といっても砂ではなく岩、その中を荒れた道が一本地平線までつづく。たまにすれ違う車は、どれもほこりまるけでなにか回りの風景とやたら馴染んでいる。回りがこんな所ばかりのカシュガルはまさに砂漠のオアシスだとつくづく感じてしまう。いまさらながらメロンやすいか、いちじく、それにぶどう等が懐かしく感じられる。そのうちに同乗するパキスタン人が切ったメロンをくれる。アリにパキスタンの様子を聞くが、最後には決まって No Problem. 「どこへ行ってもみんなそう言うね。本当にだいじょうぶ？」と聞くと今度は「インシャーアラー（神のみぞ知る）」と言う。



だんだんと中国側の国境が近づく。平原のまっただ中にぽつんと小屋が数軒あるだけ、近くに見える山を少し行けばソ連、もう少し行けばアフガニスタン。銀行の事務員に聞くと1ヵ月交代で勤務していると言っていた。こんな寂しいところに1ヵ月、どの人もやたら話をしたが。でもこの職員や公安はみんな漢人、ウイグル人を見慣れてきた目には少し不自然な感じがせざるをえない。ここは国境なのだ。相変わらず無愛想なイミグレ、カスタムをすぎて、晴れて中国を出国。バスはフラジュラブ峠への坂をとろとろと進んでいく。国境といってもパキスタンの軍人が二人立っているだけ、あと変わったことといえばバスが右車線から左車線に移っただけ。パキスタン人たちは自分の国に帰ったことを喜び、私は中国での思い出を懐かしみ、みんなで大騒ぎ。国境を過ぎると同時に車内みんなで叫びました。「Good by China」と。

マ ッ ツ 君 の 人 間 論

マ ッ ツ ・ ア ン ダ ー ソ ン

私が日本へ来てから二年以上がたちました。母国はスウェーデンですが日本へ来る前に高校と大学のころヨーロッパ諸国を何回か回りました。それから、岐阜大学に在学していたころ夏休みに中国・韓国を訪れました。今までいろんな国へ行っていますが観光ですから滞在の時間はそれほど長くなかったです。長くても一か月ぐらい。外国で長く滞在するのは日本が初めてです。だから、日本は第二の母国となったような気がします。

来る前に日本にどんなイメージがあったのでしょうか。ヨーロッパ人にとって日本はどんなイメージがあるのでしょうか。ヨーロッパでは日本のイメージと言うとだいたい二つの像が浮かんできます。ひとつは東京のイメージです。未来の都会というイメージです。高層ビル、コンクリート、都内高速道路、混雑、商売、金融、財界など。もうひとつのイメージは京都のイメージです。御所、神宮、お寺、鹿。つまり、伝統文化と歴史。

東南アジアの文化などは西洋であまり知られていません。それで、ヨーロッパ人にとって東洋の社会・文化・風俗は非常に神秘的に見えます。神秘的な東洋、などの表現がよく使われています。

さて、世界をいくつかの文化圏に分けてみましょう。分け方はもちろんいろいろありますが大きく分けて次の三つに分けることができますでしょう。キリスト教文化圏、イスラム教文化圏、東洋文化圏。キリスト教文化圏とイスラム教文化圏の場合は宗教がそのイデオロギーの主役を果たしています。東洋文化圏において代表的な宗教は仏教です。しかし、特に中国と日本の場合にそうですが仏教は大きなイデオロギー的な役割を果たしているとは言えないでしょう。東洋思想の基礎となるのは一応儒教と実証主義だと言えます。

この三つの文化圏の中に入らない国または文化がたくさんあります。それらを軽視するつもりではなく、ただ、今の世界ではそれらは主流となっていないということです。それに、先に述べた文化圏のひとつの中でもいろいろと分けることができます。たとえば、キリスト教文化圏は資本主義国家と共産主義国家との間またはプロテスタント教とカソリック教との間、とか北米と南米との間に、時に激しい対立があります。しかし、それでも、宗教のおかげでは深層レベルでの人生観とか人間観とか道徳・倫理観がほとんど共通しています。ほかの共通点は言語、文学、科学、学問などでしょう。特に歴史で見るとそれが明らかでしょう。

ひとつの文化圏の中でいろいろと対立があって、まして文化圏と文化圏の間には対立とか摩擦が起きないはずはないでしょう。文化圏と文化圏との間にはどんな違いがあるのでしょうか。どのレベルの違いでしょうか。対立・摩擦などのような問題をどう解決すればいいのでしょうか。

それぞれの文化圏の風土、気候、一般状況が違うのでそれぞれの文化圏の歴史の発展がだいぶ違ってきました。その違いは生活、風俗、習慣、食文化、経済状況、社会体制、人間関係、思考様式のあらゆる面で現われています。また、こういったような文化現象は少なくとも二つのレベルにあると思います。一つは表面レベルで、もう一つは深層レベルです。外国を訪れて外国で生活してみるといろんな問題が出てくることがあります。習慣が分かりにくいとか変わっているとか、食べ物が口に合わないとか、言葉が分からないとか、地域の人の考え方が理解しにくいとか。しかし、食べ物の場合は、慣れてきたら何とかなります。習慣もそうでしょう。その国の習慣と言葉をすこしぐらい習うのはそれほど難しくはないのです。それから、それらを習えば習うほど生活は楽になっておもしろくなります。しかし、これはまだ表面レベルです。これに対して、思考様式や人間関係は深層レベルをなしています。深層レベルは個人の性格を構成するレベルです。人間はみんなもちろん自分の生まれ育った文化に深く染まっています。だから、この深層レベルで違った条件・違った文化に適應することが非常に難しい、あるいは不可能といえましょう。

文化圏と文化圏の間にある意味で根本的な違いがあるようです。それで、摩擦とか対立とかまったく起きないはずはないのです。では、これを防ぐためにどうすればいいのでしょうか。やはり、平和な交流の前提となるのは相互理解でしょう。おたがいに理解するために知識と同情が必要です。異文化・相手の文化を深く勉強する必要があります。ところが頭でその文化を知ることだけではなくて、心で相手の文化を知ることにも非常に大切です。知識と同情を持って、おたがいに理解への意欲または妥協への努力があれば、同意へ達する可能性も一層高くなるでしょう。

もう一つの重要なことがあります。それは適應性です。ある程度相手の考え方やコミュニケーションのしかたに適應することが非常に大切です。そうしないと妥協を得ることが不可能になります。適應というのは自分を捨てることではなくて、自分の主張をしながら相手の立場を理解しようとし相手の意見を取り入れることです。結局一番大事なのは自分の文化を愛し相手の文化を尊敬することではないでしょうか！

私自身は日本へ来る前に大学で日本語を習っていたし本や講義を通じて日本のことを勉強していました。それでもまだ日本のことを神秘的に、かつ不思議に思っていました。けれども、二年以上

日本で過ごしてきた今、日本中を旅行して、いろんな人と出会っていろんな人と話したりテレビを見たり新聞を読んだり日本についての本を読んだりして、ある程度日本のことを理解し始めたような気がします。日本は自分の国と比べて似たところも違ったところもあります。違ったところも、自分の国とどういう風に違うか、どんな点で違うか、だいたい分かってきました。そうすると私にとって日本の不思議はなくなりました。といっても、私は日本のことを完全に理解しているとはもちろん思っていません。だから、これからも日本の研究でますます頑張りたいと思います。

※マッツさんは '88年10月から '89年12月まで岐阜大学教育学部に在籍し、'89年12月から高鷲村教育委員会に属し、現在英語講師として、同村にて活躍中です。

平成2年度 国際交流室 行事報告

- 4月 前期日本語授業ガイダンス
前期日本語授業開始
- 5月 インストラクター交流会
- 6月 岐阜大学サマースクールガイダンス
ルンド大学 Welcome Party
- 7月 第1回国際理解教育の集い（チュンさん、リンさん）
ルンド大学 Farewell Party
- 9月 前期日本語授業終了
- 10月 後期日本語授業ガイダンス
後期日本語授業開始
インストラクター交流会
ホームステイファミリーとの懇談会
日本語学力テスト
- 11月 第2回国際理解教育の集い（フェルナンドさん、レーさん）
- 12月 国際交流室ハイキング
第5回国際日本語スピーチ大会
- 1月
- 2月 日本語スピーチテスト
第3回国際理解教育の集い（エミさん、ホーさん）
後期日本語授業終了
- 3月 卒業・帰国留学生を送る会

◆編集後記

地球温暖化と言われながら、今冬は以外に多くの雪が降りました。伊吹連山の白の眺望を楽しんでいると、世界の激動も忘れてしまいそうです。湾岸戦争では日本の国際貢献についてさまざまな意見が噴出しました。国レベルの議論はさておき、草の根の国際交流は今も昔とかわらず、個人レベルのボランティア精神に支えられています。News Letter では、その現場を生々しく伝えられたら……と願っています。皆様の現場の声をお寄せ下さい。（M. M.）

発行 岐阜大学国際交流室 ☎501-11 岐阜市柳戸1-1 ☎(0582)30-1111 内線2380/2381 編集・宮田 中島